

# 写真は語る

長野市公文書館資料【明治～大正】（1/3）

長野市公文書館

## はじめに

長野市公文書館が、公文書館所蔵の資料や『長野市誌』を中心に、長野市域の歴史を市民に分かりやすく記述した「探究ながの史」の連載を『長野市民新聞』に開始したのは、平成 23 年のことでした。その後、「写真は語る」「公文書館資料が語る戦後 70 年」「公文書館資料で振り返る市町村の歩みと暮らし」と、続けてきました。

長野市域の歴史に対する理解を広く市民共通のものにしていくためには、新聞連載だけではどうしても限界があります。地域の歩みをより一層身近な出来事として受け止めていただけるよう、今回これらの記事をホームページに掲載することとしました。

「公文書館資料が語る戦後 70 年」に続き、第 2 弾として「写真は語る」（平成 26 年 5 月 3 日～27 年 5 月 30 日掲載）を掲載します。長野市公文書館が所蔵する写真をもとに、長野市の歩みや市民の生活、市を襲った災害などの様子について記述したものです。多くの市民の方に読んでいただけることを願っています。

No.	タイトル名	執筆専門主事	掲載年月日	頁
1	116年前若松町に開庁 -市政を見守った歴代の長野市庁舎-	松島 耕二	2014年 5月 3日	2
2	改修で発展の基盤に -拡張前の中央通り 市街の狭さに苦しむ-	宮原 秀世	2014年 5月 17日	4
3	「三幸座」道路に濁流 -明治の湯福川出水 善光寺周辺を襲う-	西澤 安彦	2014年 6月 7日	6
4	露座の仁王像 故郷へ -明治45年の御開帳 飯山の仏師が制作-	松島 耕二	2014年 6月 21日	8
5	戸隠から上水道敷設 -電動巻き上げ機で材料や砂利を運搬-	宮原 秀世	2014年 7月 5日	10
6	2尺玉で名をはせる -晩秋の夜空を彩るえびす講 名煙火師-	松島 耕二	2014年 7月 19日	12
7	長野駅近く中御所に -県立工業学校が開校-	西澤 安彦	2014年 8月 2日	14
8	篠ノ井駅で救護活動 -関東大震災により避難者が乗り継ぎ-	宮原 秀世	2014年 8月 23日	16

※本稿は長野市民新聞連載「写真は語る 長野市公文書館資料」〔2014年(平成26年)5月3日～2015年(平成27年)5月30日〕を、ホームページ掲載にあたり一部加筆・修正を加えたものです。

なお、本稿のホームページ掲載にあたって、御協力いただきました長野市民新聞社様にお礼申し上げます。

# 1 116年前若松町に開庁

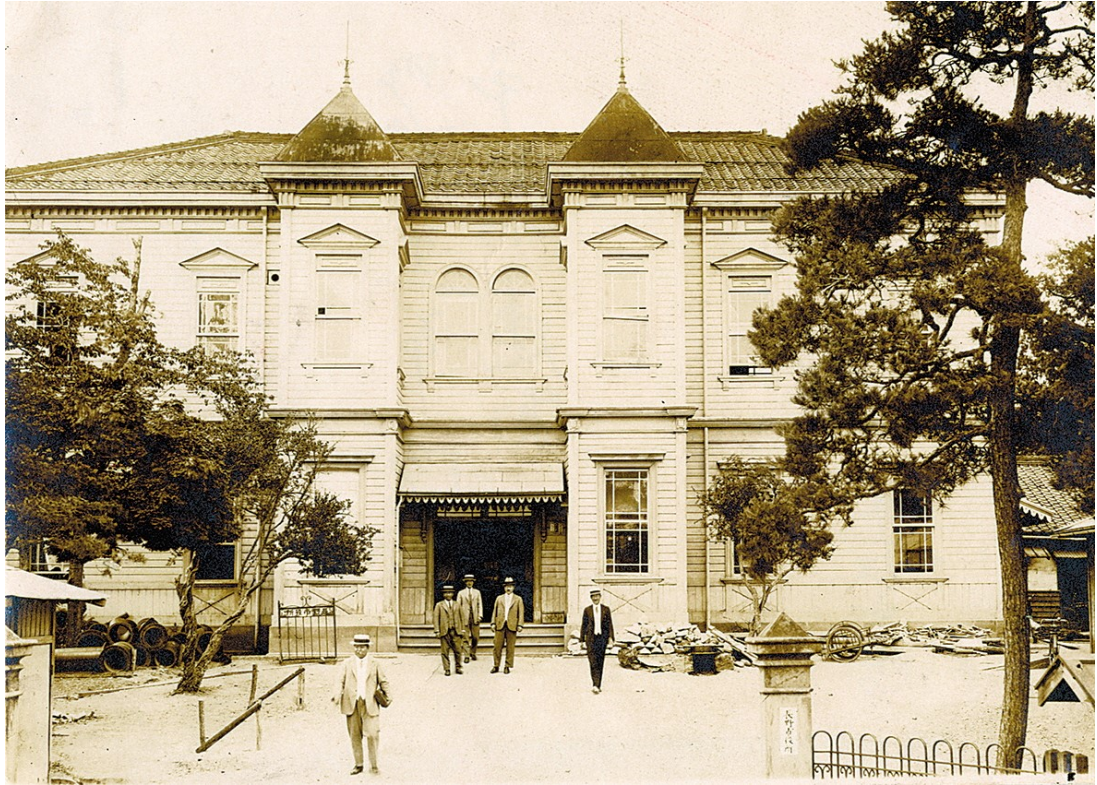
— 市政を見守った歴代の長野市庁舎 —

現在、長野市役所第一庁舎と長野市民会館の建て替え工事が進められています。3代目となる新しい庁舎は緑や景観、ユニバーサルデザインなどに配慮したモダンで明るい建物（設計・楨文彦氏）になる予定で、平成27年3月の完成を目指しています。

初代の市庁舎が造られたのは今から116年前の明治31年（1898）のことでした。その前年、市制施行により県下で初めて「市」となった長野市が、手狭になった町役場を新築移転したのが市庁舎の始まりです。所在地は若松町で、師範学校（現信大教育学部）や長野県庁の東側にありました。当時の若松町はこのほかにも上水内郡役所や附属小学校、活版所などがあり、官公署や文教機関の中心地でした。

写真は開庁当初の市庁舎です。正面玄関の前に集まっている背広姿の男性たちは当時の職員でしょうか。まだ珍しい洋風建築木造2階建ての建物は遠く丹波島橋からもその姿を望むことができたといわれています。緑町に移転するまでの67年間、明治・大正そして昭和の高度経済成長期まで市政を見守り続けました。数回の増改築で当初の姿はとどめていませんでしたが、その役目を終えてからは「長野市青少年の家」として昭和59年（1984）まで活用されたので、ご記憶にある方も多いと思います。

昭和40年10月に完成した2代目の市庁舎は、早稲田大学教授（当時）で川中島出身の建築家・十代田三郎の設計によるもので、将来の人口増を見越し、30万都市の市政を想定して建設されました。地下2階、地上8階（一部11階）建ての庁舎は、まだ高いビルも少なかった当時、ランドマーク的な存在だったことでしょう。1、2階に戸籍・住民登録・水道などの市民サービス機能を集約し、窓口行政の充実を図ったのもこの建物の特徴の一つでした。約50年にわたり親しまれてきたこの市民窓口は、3代目になっても同じように2階フロアに引き継がれていきます。



若松町に建設された竣工直後の初代長野市庁舎(明治 31 年 10 月)



緑町に移転新築された 2 代目庁舎(昭和 40 年 10 月)

## 2 改修で発展の基盤に

— 拡張前の中央通り 市街の狭さに苦しむ —

大正時代に長野市が近代都市として大きく発展する基盤がつくられました。その一つが中央道路の改修です。

南石堂町から善光寺仁王門下までの街路は、ほぼ直線の広い道路となっています。これは大正13年(1924)に中央道路工事で拡張された街路です。中央道路とは、その道路工事のときにつけられた名称で、それまでは単に大通りとか町名の通りと呼ばれていました。

中央通り沿いは、古くから善光寺の門前町として大門町・後町・問御所町・新田町・石堂町・末広町というように徐々に町が発展してきました。そのため写真を見てもわかるように道幅は大変狭く、旧後町島ノ寮付近は荷車が2台並行して通れず、祭りなどで人が集まると身動きもできないようなことがありました。最も広い大門町では5間半(約10m)あるものの、後町ではわずか2間半(約4.5m)しかなかったのです。

この道路の改修によって発見されたことですが、善光寺本堂に至るこの付近一帯の丘地に、何の計画もなく無造作に市街を築いた証拠として、後町から新田あたりを掘り返したとき道路に使用した大石が不規則に並んでいたり、坂のような所があったりして、雑然たるいにしへの跡をとどめていました。

善光寺の御開帳などに全国から何十万という信者が集い、市街の狭さに長いあいだ苦しんできた関係町民は事あるごとに、たとえどのぐらいでもよいから、もし広まるものなら広めたいものだと言々に訴えていました。しかし、見渡す限り隙間なく並んでいる市街地を切り取って道路を広げるなどということは到底不可能だとして一笑に付されたのです。大正8年、沿道の有力者が会合を開いて「道路を拡張しなければ、商家だけでなく長野市の発展は望めない」として、牧野市長に道路改修の促進を陳情しました。これが導火線となり、いよいよ道路拡張の実現に向けて動き始めたのです。



中央通り(上後町)に建てられた日露戦争兵士凱旋門(明治 38 年)



拡張前の中央通り(明治末)

### 3 「三幸座」道路に濁流

ー明治の湯福川出水 善光寺周辺を襲うー

明治44年(1911)8月3日から降り始めた雨は、4日になっても降りやみませんでした。午後11時ごろからは雷鳴をともなって雨足はあっという間に強くなり、大峰山と葛山の間を流れる湯福川の水量が急速に増しました。

住民の心配が現実となり、崩落して川をせき止めていた土石は、一気に押し出して上流の塩沢から横沢町、善光寺北から東之門町、横町、東町、岩石町を次々と襲い、濁流は権堂町、三輪田町との境を流れる鐘鑄(かない)川に流れ込みました。鐘鑄川より南側の地域は辛うじて水害の難を逃れることができました。

暗闇の中で甚大な被害が発生していました。塩沢鉱泉の浴室は瞬く間に流され、死人が出ました。湯福神社では押し流された家が衝突して鳥居が二つに裂け、境内には巨石が散乱しました。さらに、城山小学校の暗きょ(地下水路)の入り口は流木でふさがれ、激流は東之門町の通りを流れ下り多くの家々が浸水し、武井神社近くでは水深が1m余に達したほどでした。

当時の長野市役所は、この生々しい災害の様子を記録写真に残しています。掲載した写真もそのうちの1枚で、写っている建物は善光寺の北東の角、道を挟んだ北側にあった劇場の三幸座(みゆきざ)です。

善光寺側には高い土手が築かれていたため、川からあふれ出た濁流は道路や公園側を流れました。洪水から一夜明けた5日の光景でしょうか。泥水がまだ残り、枝や石が堆積した道路に、着物姿の子どもたちが三々五々様子を見に出てきています。後年の昭和15年(1940)10月、湯福川から獅子沢川へ分水用のトンネルが完成し、湯福川の洪水の危険性が少なくなりました。

三幸座の前身は善光寺境内の鐘楼近くにあった見せ物小屋の常磐井座です。明治天皇行幸のときに城山の高台に通じる道が開かれ、架けられた橋が「みゆき橋」と呼ばれ、その橋の近くへ明治19年ごろに移転して「三幸座」と名乗りました。大正4年(1915)7月には、当時人気が高かった芸術座の松井須磨子(松代町出身)が主演する「サロメ」などが公演され、本格的な近代演劇が長野にも登場したのです。





濁流に浸かった「三幸座」前の道路の光景(明治 44 年 8 月)

## 4 露座の仁王像故郷へ

—明治 45 年の御開帳 飯山の仏師が制作—

現在、善光寺仁王門に安置されている仁王像は高村光雲・米原雲海の師弟合作によるもので、仁王門落慶の翌大正 8 年（1919）9 月に開眼法要が営まれました。光雲らによって仁王像が制作されたのは、明治 24 年（1891）の火災で仁王門とともに焼失したためです。

明治 24 年 6 月 2 日、上西之門町の商家の物置から失火。瞬く間に善光寺門前一带に燃え広がりました。ひと月余り前にも火事があり、この 2 度にわたる火災は「長野の大火」として語り継がれるほど大きな被害をもたらします。6 月の火災で焼失した建物は 500 棟以上に上り、仁王門のほかに大本願や院坊の大半、寛慶寺の寛喜庵なども焼け落ちました。

仁王門は弘化 4 年（1847）の善光寺地震の際にも焼失しており、慶応元年（1865）にようやく再建されたばかりでしたが、またもや焼け落ちてしまったのです。間近に迫っていた明治 27 年の御開帳では仁王像もない仮の門を急場でこしらえて当座をしのぎました。ようやく再建に着手したのは大正 3 年。その 4 年後に竣工し、大正 7 年の御開帳で落慶式を執り行っています。

一方、仁王像は明治 45 年の御開帳のときに「露座の仁王像」が置かれました。これは飯山の仏師・清水和助が請け負って制作したもので、和助は職工数十人とともに既存の仏像をわずか 1 カ月で修繕し造り上げたといいます。像の丈は 1 丈 3 尺 5 寸（約 4 m）で、木像の上に和紙を貼り、表面に黒色の漆を塗ったものでした。お顔がことのほか大きく、見上げるとさぞ迫力があつたことでしょう。

御開帳後は公園地に移して保存する計画でしたが、仁王門の再建工事が始まると、門近くの端に横倒しに放置されていたといいます。新しい仁王像が完成すると、鶴賀田町の普濟寺を経て信更町安庭の真龍寺本堂に長く安置されていましたが、最近、飯山市が譲り受け、和助の故郷に 1 世紀ぶりに戻りました。傷みのひどかった下部の修理や漆を塗り直すなどの修復を施したのち、現在は「寺のまち飯山」のシンボルとして JR 飯山駅前公園に建てられた仁王門に安置されています。



明治 45 年に善光寺御開帳時に置かれた露座の仁王像



JR飯山駅前の仁王門と故郷に戻った仁王(阿形)像(筆者撮影)

## 5 戸隠から上水道敷設

### ― 電動巻き上げ機で材料や砂利を運搬 ―

飲料水の確保に苦しんできた長野町（明治 30 年市制施行）は明治初年から明治 10 年代にかけて、灌漑（かんがい）と飲み水を兼ねて戸隠から瑠璃堰（めのうせぎ）を引く用水事業に力を尽くしましたが、実ることなく終わりました。ようやく大正 2 年（1913）3 月 14 日に上水道の工事实施の認可があり、水源を戸隠の瑠璃沢に求め、3 月 30 日に起工式を往生地浄水場予定敷地で行いました。

工事は全域を①戸隠工区～貯水池工事および導水管布設工事の一部、②芋井工区～導水管布設工事、③長野工区～浄水場工事、④千歳町工場～配水管布設工事の 4 区域に分けて進められました。

工事は各所で困難を極めました。導水管布設工事は延長 4 里余（約 16km）でしたから戸隠、芋井、長野の 3 区に分割して行われました。長野と芋井地区の赤渋間はほぼ戸隠里道に沿って布設しました。ただし荒安～笹峰間は最も急勾配の地に延長 270 間余（約 486m）の導水路を新設しました。これが竣工後、俗に水道坂と呼ばれる場所です。

この工事では 15 馬力電動巻き上げ機を据え付けて諸材料の運搬をしました。赤渋と戸隠の間はほとんどが飯縄山の裾野で比較的穏やかな勾配でしたが、林間や原野を切り開いての工事でした。

戸隠と長野との交通運送機関は駄馬によるほかに、千歳町工場で製造したコンクリート管や鉄鋼管は、戸隠里道の一部改修して二輪馬車で狭く曲がりくねった急勾配の道を運搬しました。

往生地浄水場工事でも市街地から 200 余尺（約 60m）の高地で道路も険悪のため、材料運搬には延長 200 余間（約 360m）を開削して道路をつくり、写真にあるように頂上に 15 馬力電動巻き上げ機や 10 馬力モーターを据え付け、狐池材料置き場から濾過（ろか）用砂利や工事諸材料を運搬しました。

こうして、大正 4 年 4 月 1 日に給水が開始され、11 月 24 日に竣工式を往生地浄水場で行いました。6 年 4 カ月の年月と 85 万円の工費が費やされて、市民生活の安定と市発展の基盤がつけられました。



上水道工事で往生地貯水場への電動巻き上げ機による砂利運搬(大正 2 年)

## 6 2尺玉で名をはせる

—晩秋の夜空を彩るえびす講 名煙火師—

「花火」といえば夏の風物詩ですが、長野では晩秋の澄みきった夜空を彩る「長野えびす講煙火大会」が何といてもなじみの深い花火大会でしょう。西宮神社（岩石町）の祭礼（えびす講）で初めて花火が打ち上げられたのは明治32年（1899）のこと。第二次世界大戦で一度中断されたこともありましたが、今年（平成26年）で109回を数える歴史のある花火大会です。

長野はもともと煙火の製造や打ち上げの盛んな土地でしたが、今日のえびす講煙火大会の基礎をつくったのは大正時代、煙火大会の主催者として陣頭に立った長野商業会議所専務理事の鷺澤平六でした。

鷺澤は地元煙火師の育成や、その活動を大いに支援し、煙火大会のみならず長野の煙火産業の発展に力を注ぎます。特に当時最大級の大玉だった2尺玉（直径約60cm、20号玉）の打ち上げにも熱心で、自費を投じて「春雷筒」と命名した鋼鉄製の打ち上げ筒を製作するほどでした。それに応えるように藤原善九郎や西沢長蔵、藤原彰、青木儀作といった地元煙火師も切磋琢磨（せっさたくま）し技を競い合い、長野の花火、煙火師は全国にその名をはせるようになったのです。

写真は、昭和12年（1937）に開催された「長野商工祭」を記録した写真集の中の1枚です。解説には、

「奉納商工煙火に従事した煙火師と巨弾春雷筒新調前に使用したる二尺と尺の筒。右より鈴木元義、青木儀作、藤原彰。長野には往昔より煙火の打揚げ行はれ、大正三年頃より更に進歩発達し、大正五年十一月二十日二尺玉打ち上げに成功す、後二尺玉打上鋼鉄製春雷筒を鑄造、長野市恵比寿講大煙火としてその名は内外に挙ぐ」とあり、高さ5mはあろうかという巨大な2尺玉打ち上げ木製筒を背景に、2尺玉を囲んで長野を代表する3人の名煙火師が肩を並べています。

そしてもう1枚の写真は、火薬の炸裂（さくれつ）に耐えられるよう筒の強度を増すために束ねた竹の籠（たが）をはめている作業風景で、大正時代の初めに撮影されたものです。



2尺玉花火の打ち上げに使われた大筒と名煙火師たち  
(昭和12年、長野商工祭)



打ち上げ筒の製作風景(大正初年)



長野えびす講煙火大会の打ち上げ花火  
(平成25年11月23日、犀川河川敷)

## 7 長野駅近く中御所に

— 県立工業学校が開校 —

明治時代の長野県の中等工業教育は、染織・漆器・裁縫などの技芸教育が中心で、重化学工業と結びついた工業学校の設置は遅れていました。大正3年（1914）に第一次世界大戦が始まると、県下の産業界や県民の間に工業学校設立の気運が次第に高まっていきました。長野県は、このような県民世論の動向も受け、大正5年になると工業学校設置に向けて、文部省との打ち合わせや関東北越地区の工業学校を視察の上、11月の県会に設立案を提出しました。

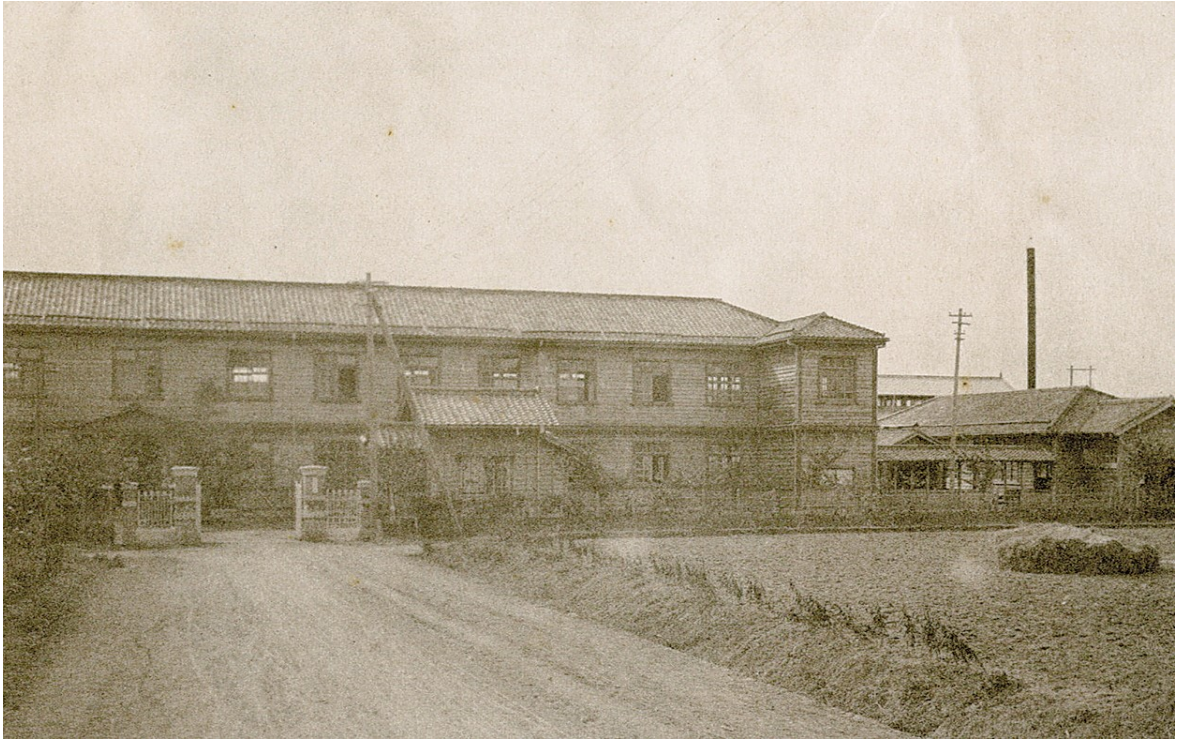
県は設立の理由に、①時代の趨勢（すうせい）、②工業界の人材育成、③地方産業の改善発達などを挙げ、また設置学科は、現代文明は機械と化学の力によることが大きいので、機械電気科・応用化学科に定めた、と説明しています。

工業学校設立案は県会の議論を経て12月11日に通過しました。学校の設置場所は当初、長野市西長野が有力でしたが、土地の高低差が大きかったため、上水内郡芹田村中御所（長野市中御所）に決定しました（長野バスターミナル・八十二銀行本店敷地）。長野市に隣接し、長野駅にも近く交通の便がよかったからです。敷地は長野市が田畑約9,800坪を買収し、整地して県へ寄付しました。

大正6年8月に文部省の認可が下り、9月に学則や開校期日などを発表しました。修業年限4年、定員220人（機械電気科30人・応用化学科25人）、校名は長野県立工業学校（9年4月に長野県長野工業学校と改称）、志願者は満14歳以上の男子、7年4月1日開校などとされました。修業年限は通常3年でしたが1年長く、中等工業教育界では西の都島（大阪、尋常科卒・修業年限6年）、東の長工と並び称されました。

4月1日の入学試験には募集人員55人に対し、県下全域から224人の志願者があり、結局増員して76人（機械電気科50人・応用化学科26人）を合格としました。難関の入試を3人が突破した塩崎村（篠ノ井塩崎）では村を挙げて祝福しています。大正8年1月、新聞は「機械室の煙突から煙を吹いて全部の機械が運転」すれば、さぞかし壮観で「長野市の一名物になるだろう」と報じています。校舎落成式は大正10年11月に行われ、建築費・機械設備費36万円余の大工事でした。





大正 7 年 4 月開校の長野県立工業学校(後の県長野工業学校)。  
校舎落成は同 10 年 11 月(「落成記念写真帳」より)



長野工業学校の機械工場(大正 10 年 11 月)

## 8 篠ノ井駅で救護活動

— 関東大震災により避難者が乗り継ぎ —

大正 12 年（1923）の 9 月 1 日午前 11 時 58 分、相模湾中央を震源とするマグニチュード 7.9 の巨大地震が起きました。関東全域と静岡・山梨にこの地震による火災の被害があり、全体で焼失戸数 44 万 7,128 戸、死者 9 万 9,331 人、罹災（りさい）人口は 340 万人余りに達しました（震災予防調査会報告）。

東京・横浜には働き口を求めて多数の地方出身者が居住していましたが、故郷や親戚・知り合いなどを求めて地震直後から被災地を離れ始めました。しかし逃れる手段となる鉄道が不通という困難が待ち構えていました。東海道・中央両線は全く不通のため、関西方面に避難するには信越線を利用して篠ノ井経由で向かうほかなく、そのため乗り継ぎ駅であった篠ノ井駅には 2 日夜半より避難者を満載する列車が到着しました。

篠ノ井町内堀組青年会有志は、とりあえずお茶の接待や炊き出しを開始しました。4 日には県からも出張し、郡役所・篠ノ井町青年会・更級郡連合青年会・在郷軍人更級郡分会などはそれぞれ部署を定め救護にあたりました。また町役場は丸屋に救護事務所を設け、駅前に天幕を張り救護に従事しました。さらに郡医師会は傷病者救護所を駅の貨物置き場の一部に設け、尾澤組などが宿泊所の準備などを行いました。

更級郡役所は 9 月 4 日から篠ノ井駅で下車した救護避難者の統計を取り始めました。この統計は笹子トンネル内の崩落が復旧し、中央線が開通して更科郡役所による篠ノ井駅救護所が閉鎖された 17 日まで続けられました。14 日間の乗客数は 5 万 7,448 人、そのうち宿泊した人は 2,476 人、医療救護を受けた傷病者は 1,016 人に上りました。各線の乗り継ぎ駅では避難者が押し寄せることが十分予測されたため、受け入れ態勢について県の内務部から次のような具体的な指示が出されていました。

- 一 主ナル停車場ニ救護所ヲ設ケルコト
- 二 救護所ハ郡（市）町村ニ於テ之ヲ直営スルカ若クハ特志団体有志等ヲシテ之ヲ設ケシムルコト
- 三 救護ニハ簡易ナル救護材料、炊キ出シ、茶湯等ノ準備ヲナシ置クコト
- 四 係員ハ避難者ノ相談相手トナリ懇切ニ世話スルコト
- 五 左記様式ノ避難者名簿ヲ作製シ、列車到着毎ニ各車内ニ適宜数冊ヲ配布シ、避難者ヲシテ各自記入セシメ若クハ係員之ヲ記入スルコト

軽井沢駅と上諏訪駅の避難者名簿が残されていますが、残念ながら篠ノ井駅の名簿は残されていません。



篠ノ井駅での避難者の宿泊案内



篠ノ井駅前で避難者に炊き出しを配る青年団・婦人会などの人々